

奈良時代、和同開珎など金属貨幣が鑄造された。だが多くの人は米や布を交換手段としていた。貨幣が本格的に広く利用されるのは鎌倉・室町時代以降のことである。なぜ、鎌倉・室町時代になってからなのだろうか？ 鍵となるのは、ビジネスの多様化である。プリンストン大学の清滝信宏教授は「サーチ・コストの貨幣理論」を開発した。取引相手を探す手間、これがサーチ・コストである。物々交換の場合、相思相愛となる取引相手を探しにくい。しかし貨幣には、誰も

## サーチ・コストの貨幣史

い。その場合は、有用性のある物品、米もしくは塩などの方が好都合と感ずるだろう。他の誰かが貨幣を使う見込みがあるから貨幣を使う、これが貨幣経済である。一方で、誰も受け取る見込みがないから誰も貨幣を交換手段として使う人がいない、これが物々交換経済である。

例えば、ハイパーインフレは貨幣経済から物々交換経済へのシフトである。紙くず同然の紙幣は取引にもはや使えない。物品で取引相手を探さなくてはならない。まさに物々交換経済である。人々は取引相手を見つける困難さに直面する。反対に、貨幣の普及とは物々交換経済から貨幣経済へのシフトを指す。清滝教授

活躍のおかげだ。さらに肥料の品種改良も進むなど、農業生産性が上昇する。稲作以外の作物を栽培する余裕が生まれたのだ。藍・紅花（染料の原料）、楮（和紙の原料）、あるいは荏胡麻（油の原料）などの生産が増える。当然ながら、それは、染料、和紙、荏胡麻油といった加工品の生産・販売に従事する人が増えることも意味する。

ビジネスが多様化すれば、取引相手を探しやすくなる工夫、つまりサーチ・コストを節約する工夫が必要になる。「四日市」のように、日時と場所を定めて定期市を開催することはその工夫の1つだ。ここに、もう1つ重要な手段が登場した。中国との貿易で金属貨幣が流入したのである。

# 鎌倉・室町時代の制度設計が 日本経済発展の分岐点

が受け取ってくれる、という性質がある。受け取った貨幣が他の誰も受け取る見込みのないものならば、売り手は貨幣を受け取らな



名古屋市立大学大学院  
経済学研究科准教授

横山 和輝

は、このシフトにおいてビジネスの多様化が鍵になっていることを示した。数式を活用する理論分析だが、その主張は、実は歴史と整合的である。

鎌倉・室町時代、先端部分に鉄を用いた農具が普及する。これは、鍛冶・鋳物師（いもじ）といった、金属加工品を生産する職人の

預金という交換手段を提供する。実はこのこと自体が、多様なビジネスが共存する社会を発展的に持続するための制度設計なのだ。鎌倉・室町時代の人々は、この制度設計に成功した。それは、日本の経済発展における重要な分岐点となった。

よこやま・かずき 経済史・金融論。博士（経済学）・一橋大学。1971年生まれ。

